

特集

仏像修復師

地域の宝を未来へつなぐ

私たちが目にする古い仏像の多くは、何度か修復の手を加えられながら、今日まで大切に伝えられてきました。その仕事を専門におこなうのが仏像修復師です。今回は神栖市内の工房を訪ね、仏像修復への思いや技術に迫ります。

仏像への興味が一生の仕事に

伊谷勇哉さん、青野真澄さん夫妻が市内に工房を開いたのは約5年前のことです。仏像修復師は国内にわずか100人ほどしかおらず、あまり馴染みのない遠い存在と感じつつ訪問しましたが、仏像修復師となりたいきさつを尋ねると、興味深いエピソードが次から次へと繰り出され、すぐに2人の話に引き込まれました。伊谷さんは奈良県出身。父親が仏師で修復もしていたため、幼い頃からその仕事を間近に見てきたそうです。「お絵描きといえば仏像を描くし、戦隊ヒーローは全然知らないのに仏像の名前だけは詳しいような子

どもでした。小学生になると父のもとで簡単な手伝いをしたこともありまます。ですから高校卒業後は、迷わず東京藝術大学(藝大)で文化財修復を学ぼうと、心に決めていました」青野さんは日本大学芸術学部で彫刻を学び、仏像に関心を持ったのは大学3年のときです。伊谷さんの影響を受け、古美術研究旅行に参加。興福寺国宝館の金子啓明館長の授業を受けたことや、室生寺の菩薩像と出会ったことが転機となりました。「学んだことを社会で実践したいと思

事をごくださったのが行方市にある常光院のご住職さんです。それをきっかけに、途切れることなく修復依頼をいただけるようになりました」藝大大学院で研究を続ける予定だった伊谷さんを説得したこと、工房用に購入した香取市の物件を断念したことなど、紆余曲折の末に、青野さんの実家にある倉庫を改装して2人の仕事スタートしました。

互いの得意分野を生かして

実は2人も修復だけでなく、仏像制作も手がけています。「仏像制作は、彫る技術や造形に関する理解が深まるため、修復をする上でも非常に勉強になります」と青野さん。



欠損した部分を制作する伊谷さん

続けて伊谷さんが、「修復は、仏像によって状態がまるで違い、使用する材料や各時代の仏像の特徴などを学ぶ必要があるため、複合的な知識が求められます」と話します。青野さんは平安時代の仏像、伊谷さんは鎌倉時代の仏像に詳しいとのこと。それぞれ興味も得意分野も異なるため、2人で役割分担をしながら作業を進められるのが強みだと言います。修復の技術は時代とともに進化しており、年2回開催されている文化財保存修復学会でも、新しい修復技法や材料の研究発表、新たな試みが20年後30年後の維持にどう役立っているかの検証報告などがおこなわれているそうです。2人は常に情報を更新しながら、より良い修復を追求しています。

大切にしている三原則

仏像というのは文化財の中でも少



仏像を修復する工房。中央には2体の仁王像



大きさに圧倒される仁王像の手



仁王像は足の指先まで力強い



仏像の後ろで光を表す「光背」を修復する青野さん

※民法上は夫妻同一氏ですが、仕事上それぞれの氏を名乗っています